

日本科学者会議（JSA）福岡支部・公開講演会／2025年5月11日（日）／於：Zoom

「反省するドイツ」から「右傾化するドイツ」へ？ —AfD台頭の歴史的位相をめぐって—

今井宏昌（九州大学）

はじめに：「右傾化するドイツ」？

現代ドイツ：再統一（1990年）から30年以上を経て、欧州連合（EU）の中心的国家に
⇒ナチズム（国民社会主義）という「過去の克服」を踏まえた「自由と民主主義」の国
⇒解決しない「東西格差」／「オッシャー」における「ヴェッシー」へのルサンチマン
新自由主義的グローバリズムへの反発から、右翼ポピュリズムやEU懐疑派が台頭

排外主義的右翼ポピュリズム：欧州難民危機（2015年）を契機として欧州各国にて台頭
⇒ドイツでは「西洋のイスラーム化に反対する愛国的欧州人」（Pegida, 2014年結成）
がフランス週刊紙『シャルリー・エブド』襲撃事件（2015年1月）への反発で台頭
ドイツ政府の難民政策に反対／キリスト教民主同盟（CDU）のメルケル首相を非難

EU懐疑派政党：EUを少数エリートによる不当支配だと批判し、自国第一主義を掲げる
⇒ドイツではユーロ救済に反対の「ドイツのための選択肢」（AfD, 2013年結成）台頭
Pegidaとの連携をめぐっては党内で議論があったものの、基本的には協力関係締結
ジェンダーフリー促進策への停止要求／ドイツに同化しないイスラーム教徒を批判

「右傾化するドイツ」：右翼ポピュリズム、EU懐疑派の台頭／2010年代から危惧される
⇒ここでの「右」を単なる「ネオナチ」や「人種差別主義者」だと断定してしまうと、
第一次世界大戦期から続くドイツ現代史の重要な文脈・側面を見落してしまう！
本報告：「過去の克服（Vergangenheitsbewältigung）」と「保守革命（Konservative Revolution）」という2つの概念を軸としながら、AfD台頭の歴史的位相を考察

I. 戦後西ドイツと「過去の克服」

1) ナチズムへの裁きと西ドイツの模索

ニュルンベルク国際軍事裁判：連合国がナチ体制指導者を死刑・有期刑に（1945/46年）
⇒国際軍事裁判所憲章は「戦争犯罪」（戦時国際法違反）に加え、「人道に対する罪」
（非人道的行為）と「平和に対する罪」（侵略戦争の計画・準備・実行）を新たに定義
⇒ホロコースト（=ユダヤ人大量虐殺）をめぐる実態解明とその裁きについては停滞

西独：ナチズムの過去との法的・歴史的断絶を強調する東独と比較し、その断絶が不明瞭
⇒1950年代半ばまでは、世論の半数近くがヒトラーやナチ時代について肯定的に評価
⇒西側統合により社会が安定し、議会制民主主義が定着するなかで肯定的評価は減退
ユダヤ人や「ナチズムの迫害の犠牲者」、旧独支配下の西側諸国に対する補償の進展

2) 「ナチを生んだドイツ」への追及

イスラエルのアイヒマン裁判：ホロコーストを指揮した元親衛隊将校が対象（1961年）
アウシュヴィッツ裁判：絶滅収容所の管理に携わった元親衛隊将校が対象（1963-1965年）
⇒ニュルンベルク裁判で裁かれなかったナチ犯罪の責任を (西) ドイツ人自身が追及
ホロコーストに代表されるナチ犯罪の実態解明が、知識の普及、学問の発展に貢献

68年運動：学生叛乱／西独ではナチズムの過去に目を閉ざす戦前世代を戦後世代が批判
⇒反シオニスト学生：水晶の夜の犠牲者追悼式典を「欺瞞」とし爆破未遂（1969年）
プラント首相の東方外交：西独が従来棚上げにしてきた東側諸国との積極的対話の開始
⇒ポーランドのワルシャワ・ゲットー跡地で ^{ひざまず} 跪きホロコーストを「謝罪」（1970年）

3) 「ナチズムの過去」をめぐるせめぎあい

TVシリーズ『ホロコースト』放映：西獨国民に改めてナチの蛮行を提示（1979年～）
コール首相の歴史政策：「国民の誇り」重視／教科書のナチ関連記述が減少（1982年～）
⇒武装親衛隊兵士が埋葬されるビットブルク軍人墓地を慰靈のために訪問（1985年）
⇒ヴァイツゼッカー大統領：ドイツ降伏40周年演説で「過去に目を閉ざすな」と警告

歴史家論争：ナチの「人種殺戮」と共産主義の「階級殺戮」の比較が焦点に（1986/87年）
⇒E・ノルテ：ナチの蛮行を「アジア的野蛮に対する反動」でしかなかったと相対化
J・ハーバーマス：ナチ犯罪を絶対無比とし、その反省こそ戦後ドイツの原点と主張

II. 「保守革命」の思想史家とその影響

1) 「保守」で「革命」？

「保守革命」：ヴァイマル共和国期（1918-1933年）における右翼急進的政治潮流の総称
⇒新右翼の思想家A・モーラーが著書『ドイツにおける保守革命』（1950年）で適用
① 後発国ドイツにおける保守主義・民族主義、② 英仏の資本主義・帝国主義の打倒の両立を試みる 19世紀以来の動きが、第一次世界大戦の敗戦、ヴェルサイユ条約、ソ連や共産主義の台頭を誘因としながら先鋭化し、戦間期ドイツで一大勢力に発展

五類型：モーラーは「保守革命」を5つに分類／相互に重なり合い、競合・共闘関係に

- ① 民族至上派：「ゲルマン人」の生物学的優位性を重視／「ユダヤ」の排斥を訴える
- ② 青年保守派：西欧型民主主義を否定／エリート中心の「職能身分制国家」を熱望
- ③ 国民革命派：市民的価値観を否定し、兵士的価値観を重視／ソ連への共感と接近
- ④ 同盟青年：ヴァンダーフォーゲルの伝統継承／屹立した「新しい人間」を理想化
- ⑤ 農村住民運動：農業不況による負債問題に起因する反体制的・急進的な農民運動

2) アルミニ・モーラーと武装親衛隊

A・モーラー（1920-2003）：「保守革命」の思想史家として戦後ドイツで一定の地位確立

⇒バーゼルで出生／「左寄りの反ファシズム学生」でありながら、O・シュペングラー『西洋の没落』（1918/22年）や、E・ウンガー『労働者』（1932年）に感銘を受ける
第二次世界大戦中にスイス軍を脱走、非合法に国境を越えドイツ入国（1942年2月）
武装親衛隊スイス人部隊「パノラマハイム」に志願し訓練受けるも、従軍せず帰国

親衛隊（SS）：ヒトラーの護衛隊（1925年）／ナチ党内外の敵対勢力を一掃（1934年～）

武装SS：強制収容所の監視を務める武装部隊が前身／独のポーランド侵攻終了後に結成

⇒独ソ戦では行動部隊とともにユダヤ人やパルチザンを年齢性別関係なく大量虐殺
志願制（17歳以上の男子）を採用したため、最終的には組織の6割が外国人部隊に
世界観闘争：「ユダヤ・ボルシェヴィズム」に対する「ヨーロッパの防衛」の遂行者

3) 第二次世界大戦後のモーラーとその影響

A・モーラー：スイス帰国後に1年の禁固刑／第二次世界大戦後は学業と文筆活動に専念

⇒K・ヤスバース（1948年からバーゼル大学の哲学教授）の指導で博論執筆（1949年）

『ドイツにおける保守革命』：ドイツ右翼の潮流をナチズムと切り離そうとする試み

「統一できないものを統一する」困難／「自伝を博士論文に組み換える」作業

「保守」概念の大雑把さなど欠点 ⇔数百にわたる膨大な伝記と書誌のデータベース

ドイツ極右：「ナチズム」の誹りを回避するために「保守革命」伝説をモーラーから継承

⇒「非ナチ化」が形骸化されたとはいえ、西独では「国民社会主義」の礼賛はタブー

戦後における再出発に際して「保守革命」を摂取することで、存続可能性を切り拓く

「保守革命」に倣い、通常では左翼のものとされるテーマに従事し、言葉遣いを選択

モーラー：ドイツ極右の世界で高い尊敬を獲得し、新右翼ネットワークの中心を担う

E・ウンガーやC・シュミットとの交流を通じた「旧右翼」から「新右翼」への連続

III. ドイツ新右翼とその戦略

1) 戦後西ドイツにおける「戦闘的民主主義」と極右

西独：建国当初に連邦憲法擁護庁を設立し、憲法を敵視する過激派の調査・監視を徹底
⇒左はドイツ共産党（KPD）、右はナチ党の流れを汲む社会主義帝国党（SRP）を禁止
自由民主主義の敵に対して断固たる態度をとる「戦闘的民主主義」明示（1950年代）

ドイツ極右：ナチその他右翼闘争同盟の残党が結集し SRP を結成 ⇔ 禁止後は勢力細分化
⇒旧ドイツ東部領土からの被追放民を糾合／ユダヤ教施設への暴力や鉤十字の落書き
一部稳健派：キリスト教民主・社会同盟（CDU/CSU）に合流 ⇔ ドイツ社会民主党（SPD）との大連立を機に離反し、ドイツ国民民主党（NPD）を結成（1960年代）

2) 極右にとっての 68 年運動とベルリンの壁崩壊

68年運動：西独全体の「左傾化」に寄与し、極右の迷走と分裂に貢献（～1980年代）
⇒ NPD：州議会から連邦議会進出に挑戦（1969年）⇒失敗し離党者続出（1970年代）
ドイツ民族同盟（DVU）：非政党として出発（1971年）⇒ NPDへの協力（1987年）
共和党：CSU 右派が離党し結成（1983年）⇒元武装 SS 隊員が党首に（1985年）

ベルリンの壁崩壊：極右は旧東独で高まる社会不安と難民・移民への憎悪を利用して台頭
⇒難民・移民への襲撃多発／旧西独で DVU・共和党が州議会進出（1990年代初頭）
NPD：「民主国家の拒否」「反資本主義」を掲げてパレード開催／旧東独で拠点形成

3) 「国防軍の犯罪」展とドイツ新右翼

「国防軍の犯罪」展：ハンブルク社会研究所（HIS）が開催した移動展覧会（1995年～）
⇒ 国防軍の東部戦線における絶滅戦争＝大量虐殺への関与を暴露／「潔白神話」崩壊
展示内容をめぐる論争／国防軍の伝統を受け継ぐ連邦軍への批判／国防省の反発

退役軍人・保守派：展覧会を国防軍への不当な誹謗中傷だと批判 ⇔ 世論の支持得られず
⇒ 保守政治家：ナチだけの責任ではないとする「集団的な罪」論に「自虐的」だと批判
CSU 議員：抗議の意味を込めて開会式を欠席し、無名戦士の慰霊碑に献花（1997年）

ドイツ新右翼：保守層右派シンクタンク、ブレーンの不在・不足を埋め合わせるために暗躍
⇒ 国政研究所（IfS, 2000年設立）：「国防軍の犯罪」展を主催した HIS への模倣的対抗
広範囲の歴史論争を引き起こした、「メタ政治」による状況介入の手本としての HIS

おわりに：「右からの抗議」とその行方

「右からの抗議」：極右は 68 年運動を「文化破壊」だと批判 ⇔ その抗議スタイルを学習
⇒ 「メタ政治」：政治の周辺に広がる文化的な領域／社会習慣、言語、性に関する政治
知的世界での「メタ政治」遂行を通じた「極右の知識人化」と「文化的霸権」の獲得
NPD：ドレスデン空襲 60 周年に「爆撃ホロコースト」を非難して行進（2005 年）

「ザラツィン論争」：T・ザラツィン (SPD) のイスラーム系移民排斥論が発端（2010 年）
⇒ トルコ系移民をはじめとするイスラーム系移民を「生産性が低い」として誹謗中傷
SPD 内部からの移民排斥論の衝撃／新右翼が遂行してきた「メタ政治」の成果？
⇒ 新右翼：イスラモフォビアを煽っているわけではなく、むしろイスラームを評価

AfD：SNS 上でエリートや既存政党・メディア、ポリコレへの憎悪を喚起してデモに動員
⇒ ナチズムや人種主義、反ユダヤ主義を表向きは肯定せず「直接民主主義」を掲げる
「反省するドイツ」あってこそ「右傾化するドイツ」の問題にどう向き合うか？

参考文献

- 1) 青地伯水編 2010『ドイツ保守革命：ホフマンスター／トーマス・マン／ハイデッガー／ゾンバルトの場合』松嶺社
- 2) 畑上泰治 2016「排外主義者の主張と対峙するための予備的考察：ドイツの移民問題に対するティロ・ザラツィンの姿勢を例に」『論叢 現代語・現代文化』16 号
- 3) 畑上泰治 2020「多文化社会をめぐるドイツ国内の議論の研究に向けた予備的考察：多数派としての地位を失うことに対するティロ・ザラツィンの不安」『論叢 現代語・現代文化』21 号
- 4) 石田勇治 2002『過去の克服：ヒトラー後のドイツ』白水社
- 5) 井関正久 2005『ドイツを変えた 68 年運動』白水社
- 6) 井関正久 2016『戦後ドイツの抗議運動：「成熟した市民社会」への模索』岩波書店
- 7) 板橋拓己 2016『黒いヨーロッパ：ドイツにおけるキリスト教保守派の「西洋（アーベントラント）」主義、1925-1965 年』吉田書店
- 8) 伊藤有亮 2021「ドイツ連邦議会における「ドイツのための選択肢」(AfD) の言説：言語表現から見たポピュリズム」『学習院大学ドイツ文学会研究論集』25 号
- 9) ヴァイス, V (長谷川晴生訳) 2019『ドイツの新右翼』新泉社
- 10) ヴァイス, V (佐藤公紀訳) 2020『エリートたちの反撃：ドイツ新右翼の誕生と再生』新泉社
- 11) ヴォダック, R (石部尚登／野呂香代子／神田靖子編訳) 2019『右翼ポピュリズムのディスコース：恐怖をあおる政治はどのようにつくられるのか』明石書店
- 12) 牛嶋徳太朗 2020「〈保守革命〉の思想的淵源：AfD（「ドイツのための選択肢」）と国民革命派」『総合学術研究論集（西日本短期大学）』10 号
- 13) 大竹弘二 2020「戦闘的民主主義の現在」『年報政治学』71 卷 2 号（2020 年）
- 14) 大竹弘二 2023「ロシア、ドイツ、ユーラシア理念：今日のヨーロッパ右翼における反リベラルな地政学について」『アカデミア 人文・自然科学編』25 号
- 15) 小野清美 2004『保守革命とナチズム：E・J・ユングの思想とワيمアル末期の政治』名古屋大学出版
- 16) 川合全弘 2003『再統一ドイツのナショナリズム：西側結合と過去の克服をめぐって』ミネルヴァ書房
- 17) 川合全弘 2012「ある保守革命家の生涯：カールハインツ・ヴァイスマン『アルミニン・モーラー：政治的伝記』を読む」『産大法学』45 卷 3/4 号
- 18) 河村克俊 2018「翻訳と解説 ドイツにおける排外主義的運動「ペギーダ」の生成」『関西学院大学人権研究』22 号

- 19) 木戸衛一 2007 「ドイツ極右の着実な伸張」『阪大法学』56巻5号
- 20) クロコウ, Ch・G・v (高田珠樹訳) 1999 『決断：ユンガー、シュミット、ハイデガー』柏書房
- 21) 今野元 2013 「ザラツィン論争：体制化した「六八年世代」への「異議申立」」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』14号
- 22) 斎藤哲 1990 「西ドイツにおける右翼急進主義の展開：共和党を例に」『政經論叢』59巻1/2号
- 23) 佐藤公紀 2016 「「ドイツのための選択肢」の分裂とその背景」『ドイツ研究』50号
- 24) 佐藤公紀 2017 「「怒れる市民」の抗議運動の内実とその論理：AfDとペギーダを例に」『ドイツ研究』51号
- 25) 佐藤成基 2018 「グローバル化のなかの右翼ポピュリズム：ドイツ AfD の事例を中心に」『社会志林』65巻2号
- 26) ジーグラー, B (有賀健／岡田浩平訳) 1992 『いま、なぜネオナチか？：旧東ドイツの右翼ラジカリズムを中心に』三元社
- 27) 芝健介 1995 『武装SS：ナチスもう一つの暴力装置』講談社
- 28) 芝健介 2008 『武装親衛隊とジェノサイド：暴力装置のメタモルフォーゼ』有志舎
- 29) 芝健介 2015 『ニュルンベルク裁判』岩波書店
- 30) 清水聰 2020 「ドイツ政治と「ドイツのための選択肢」：ドイツ連邦議会選挙（2017年）とポピュリズム」『玉川大学経営学部紀要』31号
- 31) 高橋進／石田徹編 2013 『ポピュリズム時代のデモクラシー：ヨーロッパからの考察』法律文化社
- 32) 高橋秀寿 2017 「ドイツ極右主義：時間／空間の構造的変動と多文化社会」『立命館言語文化研究』28巻4号
- 33) 田村栄子 1996 『若き教養市民層とナチズム：ドイツ青年・学生運動の思想の社会史』名古屋大学出版会
- 34) 樽本英樹編 2018 『排外主義の国際比較：先進諸国における外国人移民の実態』ミネルヴァ書房
- 35) 中川慎二 2016 「ドイツの「反イスラム化愛国者運動」とヘイトスピーチ」『関西学院大学人権研究』20号
- 36) 中谷毅 2012 「ドイツにおける移民・イスラム教徒問題：T. ザラツィン著『自滅するドイツ』をめぐる議論を素材にして」『愛知学院大学宗教法制研究所紀要』52号
- 37) 中谷毅 2017 「結党3年の「ドイツのための選択肢」：3州議会選挙結果および基本綱領の分析を中心に」『愛知学院大学論叢 法學研究』58巻1/2号
- 38) 中村登志哉 2018 「2017年ドイツ連邦議会選挙における『ドイツのための選択肢』議会進出の分析」『グローバル・ガバナンス』4号
- 39) 名嶋義直／神田靖子編 2020 『右翼ポピュリズムに抗する市民性教育：ドイツの政治教育に学ぶ』明石書店
- 40) 橋本直人 2023 「コロナと極右と陰謀論：新型コロナ・パンデミックにおけるドイツの状況をめぐって」『唯物論と現代』68号
- 41) 畑山敏夫 1997 『フランス極右の新展開：ナショナル・ポピュリズムと新右翼』国際書院
- 42) ハーバーマス, J [他] (徳永恂 [他] 訳) 1995 『過ぎ去ろうとしない過去：ナチズムとドイツ歴史家論争』人文書院
- 43) ハーフ, J (中村幹雄／谷口健治／姫岡とし子訳) 1991 『保守革命とモダニズム：ワイマール・第三帝国のテクノロジー・文化・政治』岩波書店
- 44) 平野洋 2009 『ドイツ・右翼の系譜：21世紀、新たな民族主義の足音』現代書館
- 45) 福元圭太 2005 『「青年の国」ドイツとトーマス・マン：20世紀初頭のドイツにおける男性同盟と同性愛』九州大学出版会
- 46) フンツエーダー, F (池田昭／浅野洋訳) 1995 『ネオナチと極右運動：ドイツからの報告』三一書房
- 47) 星野智 2016 「ドイツにおける極右ポピュリスト政党の台頭：AfDをめぐって」『中央大学社会科学研究所年報』20号
- 48) 前田直子 2011 「ドイツ移民統合政策のゆくえ：ザラツィン論争をきっかけとして」『獨協大学ドイツ学研究』64号
- 49) 水島治郎編 2020 『ポピュリズムという挑戦：岐路に立つ現代デモクラシー』岩波書店
- 50) メーリング, R (藤崎剛人訳) 2022 『カール・シュミット入門：思想・状況・人物像』書肆心水
- 51) 望田幸男 1994 『ネオナチのドイツを読む』新日本出版社
- 52) 守屋純 2009 『国防軍潔白神話の生成』錦正社
- 53) 山口定／高橋進編 1998 『ヨーロッパ新右翼』朝日新聞社
- 54) 山下威士 1986 『カール・シュミット研究：危機政府と保守革命運動』南窓社